

事業成果報告書

※後日、フォーマットをメールで送信いたしますので、次のアドレスにメール添付でお送りください。

竹村和子フェミニズム基金 <t-fund@npo-ochanomizu.org>

1. 個人または団体名(団体の場合は代表者名も記入)
元山琴菜 (代表者名:)
2. 研究または活動のテーマ(課題名)
『日本における非異性愛者をもつ家族とカミングアウト—家族の葛藤と「受け入れ」過程—』
3. 助成額
320,000 円
4. 実施期間
2014 年 7 月 ~ 2014 年 11 月
5. 実施状況
<p>2014 年 7 月 13 日～19 日に横浜で行われた ISA2014(International Sociological Association)にて“Gender Differences in Reaction to Coming Out: The Reaction of Mothers of Non-heterosexual Children and their Roles”について口頭発表を行った。</p> <p>2014 年 7 月末に関西地区にて父親、母親へのインタビュー調査を行った(実費にて)。</p> <p>また、2014 年 8 月 16 日～24 日の間にインドのハイデラバードにおいて WWC2014(Women’s World Congress)、“Overcoming Heteronormativity?! The Experiences of Women in Families with a Non-heterosexual Member in Japan”の口頭発表を行った。</p> <p>申請当時、10 月に東京にて聞き取り調査を行う予定だったが、協力者との予定が合わなかったりキャンセルがあったりしたため、申請期間を延長し、2014 年 11 月に広島で母親、東京・福岡にて女性きょうだいへの聞き取り調査を行った。所要時間は、それぞれ 1 時間から 2 時間半程度であった。関西地区における母親へのインタビューを除き、すべてのインタビューは録音され、テープ起こしを行った。</p>
6. 事業成果と自己評価
<p>本研究の目的は、ジェンダーの視座を取り入れカミングアウトされた家族メンバーの性別や役割の違いに着目することにより、①カミングアウトされた家族の葛藤と「受け入れ」過程の全貌を明らかにし、②カミングアウトを「受け入れ」た家族は異性愛規範が根を張る社会でどのように非異性愛メンバーのことを打ち明け、社会と交渉していくか、の 2 点を明らかにすることであった。ISA の口頭発表では、ジェンダーの視座からカミングアウトされた母親の葛藤について発表</p>

し、発表内容およびそこで得られたコメントなどをもとに日本家族社会学会『家族社会学研究』への投稿論文を執筆した。2014年10月に発刊された同学会誌（第26巻第2号）にて『「カミングアウトされた家族」から〈非異性愛者をもつ家族〉になることとは—「家族崩壊」に対応する母親役割に着目して—』という論文の掲載に至った。

WWCでの口頭発表でも、他国の研究者やアクティヴィストたちと各国のジェンダー問題の現状やセクシュアルマイノリティの実態を話す機会が持てたことは大きい収穫であったと言える。

聞き取り調査に関しては、男性親やきょうだいから協力を得られた点においては、これまで母親中心の聞き取り調査に新たなデータを追加できることとなったことから、本研究が達成できた点であると言える。さらに、申請金額外も含め計6名に聞き取り調査を行う予定であったが、実際は7名（うち父親2名、母親3名、きょうだい2名）への聞き取り調査を行うことができたのも本研究が達成した点であると言える。しかし、依然として男性成員（父親や男性きょうだい）からの協力を得ることが難しく、本研究でも女性きょうだいからしか聞き取りができなかったのは今後見直すべき点であると言える。

最後に、口頭発表および聞き取り調査から得た知識やデータは本研究の二つの目的を達成するうえで重要な要素になると言える。聞き取り調査に関しては、テープ起こしの段階であるためまだ分析には至っていない。しかし、それらのデータをもとにカミングアウトされた家族がいかにかその事実と向き合い「受け入れ」て行くかの過程、および「受け入れ」た家族がどのように社会に交渉するかを考察することが今後期待される。